

頁	行		
一四七	下一七	「私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いました。」	
		「当然……べきはずだ……せひともしなければならぬという意志。」	
		「先を越された」という思いがあるため、打ち明ければ追いつけないし、追い越せないという思い。	
一五〇	上一	「しかしそれにはもう時機が遅れてしまったという気も起こりました。」	
		しなければならぬのに、時機のことを考えてできないと考えてしまっている。	
		私の周りの状況を気にしてしまう性格。	
		不自然であるから、時機が遅れてしまった。	
	上七	「こつちからまた同じことを切り出すのは、どう思案しても変でした。」	
		「変でした」……向こうが言ってきたからこちらからも言うというのは、相手に「先を越された」ということを示すことである。	
		弱点を示すこと。	
		弱点を示すことはKと対決するのには不利である。	
		Kに自分は劣っていると感じているのだから、弱点は絶対に見せたくない。	
		友人でありながらも優劣を意識をしてしまう私である。	
		Kに対しては学問上は劣っていると思っていたが、「人間らしさ」に関しては優れていると思っていた。しかし、ここで「向こうが言ってきたから自分も言い出す。」というようなことになる」と、「人間らしさ(恋愛の方面)」でも劣るような気がして、それで言い出せないのである。	
	上九	「私の頭は悔恨に揺られてぐらぐらしました。」	
		「私の頭は」……「私は」でもいいはずである。自分とは別のところで「悔恨」しているようである。「悔恨」しているのを自分で認めたくないのか？	
		「ぐらぐら」……平常心ではない状態。まだあまり冷静に考えられない。	
	上一	「私はKが再び仕切りのふすまを開けて向こうから突進してきてくればいいと思いました。」	
		Kからの働きかけを待っている 他人本位・自分からは動けない。	
		まだ自分には準備がない。	
	上二三	「さつきはまるで不意打ちに会ったも同じでした。私にはKに応ずる準備も何もなかったのです。」	
		「不意打ち」……戦いの時に使う用語である。私の中ではもうKとの戦いが始まっているのである。	
		次の機会は準備をしようという気持ちが出ている。	
		Kは周りを気にせず思いこんだら行動してしまう。	
		お嬢さんに対する自信があれば私のほうから言っても全く差し障りがないはずである。しかし現在お嬢さんの気持ちはKのほうにあるのではないかとこの危惧があるため、私のほうから言い出して見事振られると恥をさらすことになるのである。	

[37]

Kは周りを気にせず思いこんだら行動してしまう。

お嬢さんに対する自信があれば私のほうから言っても全く差し障りがないはずである。しかし現在お嬢さんの気持ちはKのほうにあるのではないかとこの危惧があるため、私のほうから言い出して見事振られると恥をさらすことになるのである。

上二四 「私は午前に失ったものを、今度は取り戻そうという下心を持っていた。」

「午前に失ったもの」

Kに打ち明ける機会。

Kに対して優位に立つ機会。

Kは自分に対して話したのだから、自分も話さなければ倫理的におかしくなる。自分のKに対する誠実さ・倫理性。

一五〇

上二七

「そうしてKは永久に静かなのです。」

「永久」と思われるほど長かった。

Kに結局打ち明けることができなかったので、自殺した今、本当に「永久」になってしまった。

Kが「永久」に來なければじぶんも「永久」に打ち明けられない。

暗示
焦り

下二

「そのうち私の頭はだんだんこの静かさにかき乱されるようになってきました……それが気になってたまらないのです。」

「静かさにかき乱される」

実体のないものにかき乱される。

Kの存在が大きな、そして不気味なものに思えてくる。

下八

「その時の私はよほど調子が狂っていたものと見なければなりません。」

Kに「先を越された」という思いから来る焦り。

何とかしてKの優位に立たなければならぬという焦り。

平生ではないKに対する恐れ。どういふ風に対処していいかわからない。パニック。

下二一

「いったん言いそびれた私は、また向こうから働きかけられる時機を待つよりほかにしかたがなかったのです。」

「無理にじつとしていけば、Kの室へ飛び込みたくなるのです。私はしかたなしに立つて縁側へ出ました。」

じつとしていると私はKに向かつていきそうだと知っているが、そのまま向かつていけばいいのに、気持ちのとおりにはできない私の性格。

対面・Kとの優劣が気になる。

一五一

上七

「むしろ自分から進んで彼の姿を咀嚼しながらうつっていたのです。」

Kの変化を分析している。

どうすればKに立ち向かえるか作戦を練る。

上二六

「私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くを持っていると信じました。」

Kが平生と違うのだから、何か変化があったはずである。

そのKの変化を知れば、自分がKに対処できるはずである。

このままKが優位に立つことは自分のプライドとして許せない。

「信じ」ていれば、必ず時期は來るといふ思いこみ。

下二

「同時にこれから先彼を相手にするのが変に気味が悪かったです。」

「気味が悪かった」

得体が知れない。どんな力を持っているかわからない。何をするか分からない。

この時点から私の「人間らしさ」はKに負けたか？

これから先彼を相手にするのが変に気味が悪かったです。」 [37]

自分の本当の感情よりも対面のほうを優先する。

下四 「しかもいくら私が歩いても彼を動かすことはとうていできないのだという声がどこかで聞こえるのです。」

私がどんな働きかけをしてもKの気持ちは変わらない。

「どこかで聞こえる」

自分の運命。もう自分の人生は決まったようなものである。

下六 「彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。」

「魔物」

自分より強い・自分に害を与える・恐ろしさ

一五一
下七

「私は永久彼に祟られたのではなかるうかという気さえしました。」

「永久」

これから先ずつと。どんなにKに対処してもKは絶対に変わらないのではないか？

一種の敗北宣言である。

「祟られた」

「魔物」に「祟られた」……逃げようがない。Kのことが頭から離れない。

[38]

「すると今度はお嬢さんがKに同じ問いを掛けました。」

Kに対する働きかけはお嬢さんが行う。(奥さんではない。)

「Kの唇は例のように少しふるえていました。」

何か言おうとするが、言葉を選んでいる。

何か言うべきことがKの心の中にあつた？

ここでKはお嬢さんに打ち明けようと思つたか？

「お嬢さんは笑いながらまた何か難しいことを考えているのだろうと云いました。」

Kはお嬢さんと話していたときには、いつも「難しいこと」と話していたはずである。

お嬢さんはその内容についてよく分からないが、聞いていた？

「Kの顔は心持ち薄赤くなりました。」

初めてKの表情が変化する記述である。

お嬢さんの発言に対して、心が何か変化した。

顔が赤くなる

恥ずかしさ。怒り。

お嬢さんに笑われて恥ずかしくなった？

今まで自分は「何か難しいこと」をいつも考えていたんだと分

かった。

今までお嬢さんに自分が話したことは、お嬢さんは一生懸命聞

いてくれたが、それは自分を理解して聞いていたのではなく、お

嬢さんにとつて、単に「難しいこと」であつただ。

自分の思い上がりに恥ずかしくなった？

Kの意志の強さ。

「魔法棒」[36]

Kの性格から、周りをはばからず、お嬢さんに打ち明けることはあるかもしれない。

私に告白をしたときから、いままで、頭に血が上って自分の過去のことをすっかり忘れていたが、今お嬢さんにいわれたことで、自分を思い返すと自分は第一信条にそって生きてきていたのだということを感じ出し、道にそれた自分に恥ずかしくなった。

「奥さんは十時頃そば湯を持ってきてくれました。」

「洋燈の光がKの机から斜めにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きていたものと見えます。」

十時までKは何かを考えて起きていた。
お嬢さんによって気づかされた自分の過去の道についてか？

「私は半ば無意識においと声をかけました。すると向こうでもおいと返事をしました。」

ふすま越しに会話をする　ふすまは開かないからKの心も開かない。
Kのことが無意識でも気になるから、無意識に声をかけた。

「私は今朝彼から聞いたことについて、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とつとつこつちから切り出しました。」

ずいぶんと当たり障りのない表現である。

Kに自分の気持ちを悟られないように。

「相談に乗ってやるが、都合はいいか。」というような言い方である。

「ところがKは先刻から二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直な調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で渋っています。」

昏間に告白したときと気持ちが変わっているということが分かる。

やはり顔が「薄赤く」なったことと関連があるか？

自分の気持ちはすでに昏間に言ったので、今の時点で私に言うこととはない。

今は私に言えないことで悩むのか？

この悩みがこの後のKの相談に結びつく。

自分の道というものに気づき、自分の矛盾に気づいたから、私に話すことはできない。先ほどの告白も私に矛盾を見せたものだと思いい、あまり顔を合わせたくない。

「私はまたはっと思わせられました。」

何か考えているのだなと思った。

Kは何かを考えて、また働きかけてくるのではないか？という思い。
またとんでもないことをするのは？という恐れ。

「一時二十分だと答えました。」

昏間の告白の時は、自分の思いで頭がいつぱいで、今までの「道」についてには全く考えもつかなかった？

[39]

「Kの生返事は翌日になって、その翌日になって、彼の態度によく現れていました。進んで例の問題に触れようとする気色を決して見せませんでした。」

「生返事」……いい加減な受け答え。はっきりしない返事。問題に触れたくない。自分の矛盾に気づいた。自分で答えが出ないうちは、話をしたくない。結論が出ないうちに話をしても矛盾を指摘されて苦しむだけである。

「彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは慥でした。」

なぜKはお嬢さんに話さなかったのか？

お嬢さんに話す前に私に話そうと思ったのか？

Kの性格から、目的に向かって突進するのが普通である。

お嬢さんが好きになってから、Kは「平生」ではなくなった？

お嬢さんにも話そうと思っただが、お嬢さんに「難しいことを考えている」と言われてから、自分の矛盾に気づき、お嬢さんに打ち明けようと言っ気はなくなっただけ？

「そう考えた時私は少し安心しました。」

Kがお嬢さんに進んでいかなければ、まず一安心である。

Kは今平生と違っているのだから、平生に戻せばいいのではないかというプランができあがっている？

「わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにするほうが好かろうと思っただけ、例の問題はしばらく手を着けずにそっとしておくことにしました。」

わざとらしくすると自分の気持ち悟られてしまう。

自分の（倫理的）弱点を相手にさらけ出しては、Kに勝つことはできない。

Kが何も言っただけなら、Kは何も動き出さなはずだ。

「ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあったのです。……すると彼は外の人にはまだ誰にも打ち明けていないと明言しました。」

Kに対する偵察。

Kの現状によって、これからの私の態度を決める。

「私は事情が自分の推察通りだったので、内心うれしがりました。」

Kは自分の過去があるから、すぐにはお嬢さんのほうへは進めなはずである。

弱点……Kが打ち明けてから、私はKにお嬢さんへの気持ちを言わなかつたこと。

「私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にも敵わないという自覚があったのです。」

「横着」……図々しい。度胸がある。

「度胸がある」

図々しく、度胸があるので、お嬢さんのほうへ進んでいくのではないかという危惧。

「けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。……私はそれがたにかえって彼を信じだしたくらいです。……明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起こりようがなかったのです。」

安心

度胸があり、何をしでかすか分からないけど、まだ奥さんやお嬢さんに対してどんな働きかけもしていないということを感じた。

「私はまた彼に向かって、彼の恋をどう取り扱うつもりかと訪ねました。……しかるに彼はそこになると何にも答えません。黙って下を向いて歩き出します。」

決まっていないから答えられない。

隠し立てをしているわけではない。

Kは悩んでいるということが分かる。

自分がお嬢さんのことを好きだったということへの疑問？

お嬢さんのことを誤解していたという自分への疑問？

「薄赤く」なった。

「私は彼に隠し立てをしてくれるな、すべて思った通りを話してくれと頼みました。」

利己心の現れ。Kのためを思うより、Kに対してこれから作戦を練るため。
Kに対して自分はKのためを思っているんだぞというアピール。